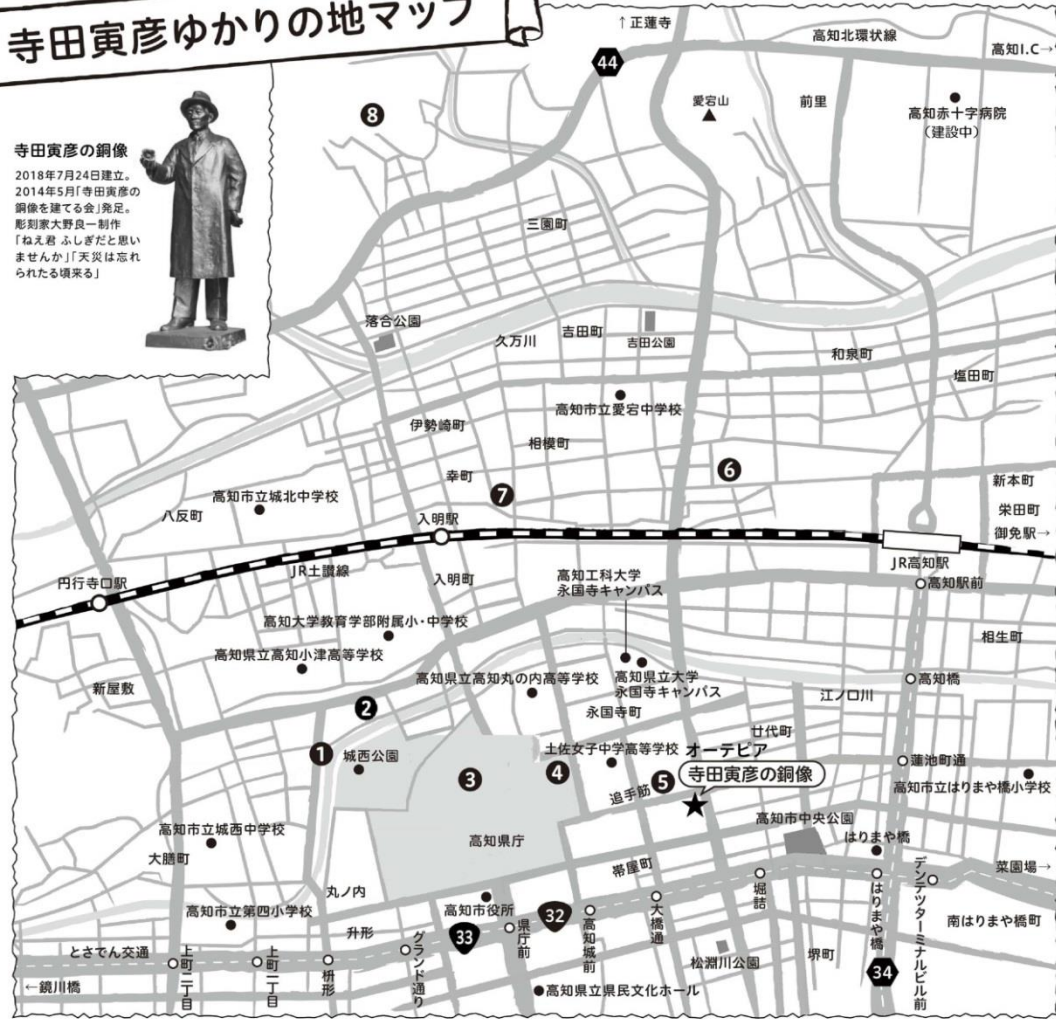


寺田寅彦ゆかりの地マップ

寺田寅彦の銅像

2018年7月24日建立。
2014年5月「寺田寅彦の銅像を建てる会」発足。
彫刻家大野良一制作
「ねえ君 ふしぎだと思いませんか」「天災は忘れられたる頃来る」



① 高知県立高知追手前高等学校
旧高知県尋常中学校在籍。創立100周年記念として寺田寅彦の銅像が建立されています。



② 高知市立江ノ口小学校
前土佐郡江ノ口小学校在籍。創立100周年記念として寺田寅彦の銅像が建立されています。



③ 小津神社
寅彦が青年時代に跡を患った折に間親が病氣平癒の願をかけたという。靈験あらたかな神社。お礼に石燈籠を寄進しています。



④ 寺田寅彦墓所
父利正、母亀、寺田寅彦、妻夏子、寛子、伸が眠っています。



⑤ 花物語文学碑 城西公園
高知ペンクラブが建立。「花物語」の書き出し部分が碑に彫られています。このあたりの草むらに幼少時の遊び場があったようです。



⑥ 寺田寅彦記念館
4歳から19歳まで暮らした部屋。父利正が購入。1949年寺田家より高知市に寄贈されました。



⑦ 高知城
小・中学校時代に遊んだところです。「雲山の花」にその時の様子が描かれています。



⑧ 高知県立文学館
「寺田寅彦記念室」が設けられ多くの資料が展示されています。

その他ゆかりの地

- ◆ 貴船神社(権崎)
妻夏子、療養の地
- ◆ 別荘・宇賀家墓所(中万々)
雄前、瑞羽、祖父市郎平、祖母、父利正の弟妻久馬の墓
- ◆ 永福寺(井口町)
父の差置久馬が関わり切腹した井口事件
- ◆ 久万川(地図上部)
「囃つき」に幼少のときに楽しんだ所
- ◆ 中土佐町大野見
父利正の祖先の屋敷跡と墓所

問い合わせ：寺田寅彦記念館 高知市小津町4-5 ☎088-873-0564

銅像の台座文字

ねえ君
ふしぎだと思いませんか

寺田寅彦

天災は忘れられたる頃来る

Sukina Mono
Itigo Kôhi Kana Bizin
Natsukorode site Utya-Kenbutsu
1934-1-2.

建立記

寺田寅彦生誕140年の記念すべき年
南海トラフ巨大地震への警鐘を鳴らし 科学する心の大切さを伝えるために 新しい図書館「オーテピア」の開館に合わせ 母校高知追手前高校(旧高知県尋常中学校)を臨むこの地に銅像を建立できたことをともに喜び合いたいと思います
ご協力いただいた多くの方々に心からお礼を申し上げます

2018年7月24日

制作 大野良一
題字 依岡 稔(紫峰)
建立 寺田寅彦の銅像を建てる会

会長 青木 章泰

寺田寅彦博士

(1878年11月28日～1935年12月31日)

銅像完成・生誕140周年 記念パンフレット

寺田寅彦

寺田寅彦は、明治11年(1878)東京生まれの物理学者で、「天災は忘れられたる頃来る」の警句を残しています。

寅彦の父は、坂本龍馬と同時代に生きた土佐藩の郷士で、明治時代には陸軍会計官となりました。寅彦は、3歳の時に大川筋の実家に帰り、少年時代を過ごしました。江ノ口小学校、高知県尋常中学校(高知追手前高校)を経て、熊本の第五高等学校に入学。そこで田丸卓郎に物理学と数学を、夏目漱石に英語と俳句を学び、東京帝国大学時代には正岡子規とも知り合いました。

寅彦は生涯に200編余りの物理論文を発表しました。その研究スタイルは、日常の諸現象を徹底的に分析し、寺田物理学ともいわれる独自の領域を切り拓きました。その過程で、「ラウエ映画の実験方法及其説明に関する研究」で学士院恩賜賞を受賞し、文化人切手にもなりました。また、一方で「冬彦集」「菽柑子集」「万華鏡」「続冬彦集」「柿の種」「物質と言葉」「蒸発皿」「触媒」「蛍光板」「橡の実」などの随筆集も残っています。さらに俳句、絵画、オルガン、バイオリンなど幅広く才能を発揮しました。「日本のレオナルド・ダ・ヴィンチ」と称する人もいるくらいです。恩師・夏目漱石とのつながりも深く、「吾が輩は猫である」の水島寒月は寅彦がモデルでした。

「ねえ君 ふしぎだと思いませんか」は寅彦が学生や若い研究者たちに折に触れて語りかけた言葉です。寅彦は、少年期を高坂山の緑と清らかな江ノ口川に代表される、美しく魅力あふれる土佐の豊かな自然の中で過ごしました。この体験が生涯を通じ、心の糧となったのです。後年、研究室で「科学者になるためには自然を恋人としなければならない」と語った寅彦は、科学者としての鋭い目と随筆家としてのしなやかな心を自然の中でじっくりと育んだのでしょう。

私たちは、寺田寅彦生誕140年の記念すべき年に銅像をこの地に建立できたことをともに喜び合いたいと思います。「オーテピア」には多くの関連資料があります。今後は、寅彦の教えに学びつつ地図を参考にして、近隣に残るゆかりの地を巡ることをお奨めします。

2018年7月24日

寺田寅彦の銅像を建てる会

上記の内容は、下記アドレスか右のQRコードにより音声で聞くことができます。

<http://toratomo.yu-nagi.com/sound/torahikosetumei.mp3>

朗読 長田修身(元高知放送アナウンサー)

寺田寅彦記念館友の会 2018年7月24日作成 (HP <http://toratomo.yu-nagi.com/>)



銅像のポーズについて

右手に椿の花を持ち、足元にも椿の花が置かれています。

このポーズの発想は、恩師夏目漱石の俳句「落ちざまに 虻を伏せたる 椿かな」から、椿の落下についての研究をしています。このことを随筆「思い出草」に記しています。

「落ちざまに^{あぶ}虻を伏せたる^{つばき}椿かな」漱石先生の句である。今から三十余年の昔自分の高等学校学生時代に熊本から帰省の途次門司の宿屋である友人と一晩寝ないで語り明かしたときにこの句についてだいぶいろいろ論じ合ったことを記憶している。どんな事を論じたかは覚えていない。ところがこの二三年前、偶然な機会から椿の花が落ちるときにたとえそれが落ち始める時にはうつ向きに落ち始めても空中で回転して仰向きになろうとするような傾向があるらしいことに気がついて、多少これについて観察した実験をした結果、やはり実際にそういう傾向のあることを確かめることができた。それで木が高いほどうつ向きに落ちた花よりも仰向きに落ちた花の数の比率が大きいうという結果になるのである。しかし低い木だとうつ向きに枝を離れた花は空中で回転する間がないのでそのままにうつ向きに落ちつくのが通例である。この空中反転作用は花冠の特有な形態による空気の抵抗のはたらき方、花の重心の位置、花の慣性能率等によって決定されることはもちろんである。それでもし虻が花の^{しべ}蕊の上にしがみついてそのままに落下すると、虫のために全体の重心がいくらか移動しその結果はいくらかでも上記の反転作用を減ずるようになるであろうと想像される。すなわち虻を伏せやすくなるのである。こんなことは右の句の鑑賞にはたいした関係はないことであろうが、自分はこういう^{きまつ}瑣末な物理学的の考察をすることによってこの句の表現する自然現象の現実性が強められ、その印象が濃厚になり、従ってその詩の美しさが高まるような気がするのである。



ねえ君 ふしぎだと思いませんか

この言葉は、寺田寅彦が弟子をはじめとして、いろいろな場で語っていたことばとして伝えられています。将来を担う子どもたちをはじめ、多くの方々に語り継いでいただきたいとの思いで記しました。

この言葉を伝えたのは寺田寅彦の弟子であり「雪は天から送られた手紙である」と言うことばを残し、雪と氷の研究で先駆的業績を挙げた中谷宇吉郎（1900年7月4日～1962年4月11日）です。

中谷宇吉郎 「指導者としての寺田先生」（1936年3月）より

私が理研にいた三年の間に、先生の仕事を手伝った主な題目は火花放電の研究であった。ずっと以前、先生が水産講習所へ実験の指導に行っておられた頃の話であるが、その実験室にあったありふれた感応起電機^{まわ}を廻してパチパチ長い火花を飛ばせながら、いわゆる稲妻形に折れ曲まがるその火花の形を飽かず眺めておられたことがあったそうである。そして先ず均質一様と考うべき空気の中を、何故わざわざあのように遠廻りをして火花が飛ぶか、そして一見全く不規則と思われる複雑極まる火花の形に或る統計的の法則があるらしいということを不思議がられたそうである。「ねえ君、不思議だと思いませんか」と当時まだ学生であった自分に話されたことがある。このような一言ひとことが今でも生き生きと自分の頭に深い印象を残している。そして自然現象の不思議には自分自身の眼で驚異しなければならぬという先生の訓えを肉付けていくのである。

天災は忘れられたる頃来る

この言葉が記されたのは、1938年7月9日の東京朝日新聞に中谷宇吉郎が寺田寅彦の言葉として紹介をしている。その書き出しは、下記のとおりである。

「天災は忘れたころに来る。 之は、寺田寅彦先生が、防災科学を説く時にいつも使われた言葉である。そしてこれは名言である。」

寺田寅彦の随筆では、下記のとおり記載されている。

「津波と人間」（1933年5月）より

津浪の恐れのあるのは三陸沿岸だけとは限らない、寛永安政の場合のように、太平洋沿岸の各地を襲うような大がかりなものが、いつかはまた繰返されるであろう。その時にはまた日本の多くの大都市が大規模な地震の活動によって将棋倒しに倒される「非常時」が到来するはずである。それはいつだかは分からないが、**来ることは来る**というだけは確かである。今からその時に備えるのが、何よりも肝要である。

「天災と国防」（1934年11月）より

（前略）悪い年回りはむしろいつかは回って来るのが自然の鉄則であると覚悟を定めて、良い年回りの間に充分の用意をしておかなければならないということは、実に明白すぎるほど明白なことであるが、また**これほど万人がきれいに忘れがちなこともまれである**。もっともこれを忘れているおかげで今日を楽しむことができるのだという人があるかもしれないのであるが、それは個人めいめいの哲学に任せるとして、少なくとも一国の為政の枢機に参与する人々だけは、この**健忘症に対する診療を常々怠らない**ようにしてもらいたいと思う次第である。（中略）

文明が進むほど天災による損害の程度も累進する傾向があるという事実を十分に自覚して、そして平生からそれに対する防御策を講じなければならないはずであるのに、それがいっこうにできていないのはどういうわけであるか。そのおもなる原因は、^{ひつきょう}畢竟そういう天災がきわめてまれにしか起こらないで、ちょうど人間が前車の**顛覆**を忘れたころにそろそろ後車を引き出すようになるからであろう。

Sukina Mono
Itigo Kohi Kana Bizin
Nutsukorode site Utyu Kenbutu
1934-1-2.

好きなもの
イチゴ コーヒー 花美人
懐手 して 宇宙見物

1934年1月2日

寺田寅彦を知っていただくことばで、当時活用が推進されていたローマ字で表されている。

1934年1月2日の寺田寅彦の日記より

色紙へいちごの絵二枚かく、一葉は黒田正夫君に贈る為なり。テンペラ絵具を使う。不出来なり、興味を失ひ、それ切り何もかゝず。

次女関弥生様の「父の思い出あれこれ」（『父・寺田寅彦』）より

「好きなもの 苺 珈琲 花 美人 懐手して宇宙見物」という、父の言葉がありますが、「美人」というのは、理研にいらっしゃった黒田さんの奥さんと、二人の若い方のことです。黒田さんが父をピクニックに誘ってくださって美人の方が御一緒だったので、その時の御礼の色紙に父の好きな苺と言葉を書いて、お送りしたものです。この時の父の写真の顔が文化切手になっています。父の亡くなった時、これが父のすべてをあらわすように思いましたので風呂敷にそめてお配りしました。

病床でのことば『回想の寺田寅彦』（小林勇編）より（亡くられる年の11月30日）お食事のことを伺ふと、「どうも度々ありがたう。しかし普段健康の時うまがつたものはもうすっかりいけない。梅干とか野菜などがいいやうだ。メロンなども食ひあきた。今一番待つてゐるのは苺だが、これもこの間から千疋屋など度々たづねさせるがまだ出ない。明日は十二月になるのだから、さうすると屹度出るだらうと思ふ。さうしたら、いくら高くて買って貰つて食べようと思つて、この頃はその事許り考へてゐる。千疋屋でも出たら、すぐ知らせてくれると言つてゐる。」（その後、亡くられる前日までの20日苺を食されている。）

